小中学生での品性(character)の発達と well-being の関係

～品性・品格教育の実践の成果を中心に～
○青木多寿子（広島大学教育学研究科）

キーワード: 品性(character), well-being, 小中学生, ポジティブな発達,

The Relationship between Character Strengths and Well-being in Japanese Children and Adolescents
Tazuko AOKI (Graduate School of Learning Science, Hiroshima University)
Key words: character strengths, well-being, children and adolescent, positive development,

人格には生まれつきの部分と生後の習慣（Character）によって培われるような部分がある。児童・生徒の人格の完成を支援しようとするとき、よい習慣が育つように、家庭・地域・学校で連携して支援してゆけば、子ども達の中に、多少のハンディを乗り越える強さを育むことが期待できる。よい習慣を培い、品性を育て、品格ある人に導くことで、子ども達の健全な成長・発達は促進されると考えられる。

Peterson & Seligman (2004)は、人の強さを創り出す品性を6カテゴリー、24項目に分類した(VIA-IS)。大竹 et al.(2005)は、この分類を日本の大学生で確かめ、これらの品性は確かにwell-being と関係していることを示した。しかし VIA-IS は項目数が多く、児童・生徒用にするのは困難である。そこで Aoki et al. (2008) は東京都の小学4年、6年、中学2年生、Aoki & Kaneko (2009) は広島市の小学校3年生から中学3年生までの児童・生徒を対象に、子ども達でも理解できる11項目の品性を取り上げ、感情、well-being との関係検討した。

本稿は、ある地域が、学区を挙げて取り組んでいる品性教育について、1年間の取り組みの成果を分析するものである。この学区では、「挨拶」「思いやり」「責任」「良心」「勇気」「公共心」「フェア」「感謝」「やり抜く心」の9つのキーワード(徳)を定め、毎月1つを取り上げ、地域全体でこの項目についてよい習慣を育むことを目指す取り組みを行っている。今回は、Aoki et al. (2008)の後の1年間の成果について報告する。

方 法

参加者 小学4年生574人(男子317人、女子257人)/小学6年生426人(男子196人、女子230人)/中学2年生314人(男子142人、女子172人)の合計1,314人。アンケートは2008年3月に実施した。なお、この内、約半数の児童・生徒が1年前の調査(Aoki, et al. 2008)にも参加している。

質問紙の構成 多面的感情尺度から3種類(ポジティブ感情、ネガティブ感情、非活動)、生活充実感尺度、主観的幸福感尺度。さらに品性については、Peterson & Seligman(2004)を参考に、11項目について各2問ずつ質問を作成した(勇気、勤勉、熱意、自己統制、楽観、平等、寛大、誠実、独創性、好奇心、感謝)。

結 果

品性の分類 Aoki et al.(2008)の分類を用いた。これは、品性に関する11項目24個の質問を、項目を基準としてクラスター分析を行ったものである(Table 1)。この分類から、勤勉と自己統制は同じカテゴリーで、それらは希望につながることで、加えて感謝は勇気や熱意と同じカテゴリー、つまり感謝とは勇気に関連するものである可能性が窺える。

Table 1 品性の分類				
含まれる項目				カテゴリー名
第一クラスター	勤勉	希望・楽観	自己統制	根気
第二クラスター	勇気	熱意	感謝	活力
第三クラスター	公平・平等	誠実		誠実
第四クラスター	独創性	好奇心		好奇心
第五クラスター	寛大			寛容

分散分析にみる実践の効果 各カテゴリー別に、学年×性別×テスト(前・後)の分散分析を行った。1回目と2回目の比較については、誠実をのぞくすべてのカテゴリーで、2回目の調査の得点が下がっていた。具体的には主効果が見られたもの(根気, $p<.01$; 活力, $p<.01$)、学年×テスト(前・後)の交互作用が有意で、4年生の一番得点が高く、中学生が一番低いものがあることがわかった(寛大, $p<.01$; 好奇心, $p<.05$)。これらのことから、品性の発達は、教育的な配慮を行っても単調増加的に得点上がるような発達をしないことが窺える。

Well-beingとの関係 次にカテゴリー別に well-being との関係性を調べるため、well-being の各尺度を従属変数、5つの品性カテゴリーを独立変数として重回帰分析を行った(Table 3)。これをベースライン測定時(Table 2)と比較すると、取り組みを始めた後では、相関関係の見られるものが増えているものが増えていることがわかる(濃い色は変化のあった相関)。

Table 2 品性とWell-beingの関係(ベースライン)

	根気	活力	誠実	好奇心	寛容	R	R ²
生活充実感	0.123	0.387	0.197		0.104	0.667	0.439
主観的幸福感		0.345				0.517	0.26
ポジティブ1(活動的)		0.478			0.181	0.569	0.317
ポジティブ2(非活動)	0.354		0.242			0.671	0.445
ネガティブ	-0.22	-0.11	-0.17			0.442	0.188

Table 3 品性とWell-beingの関係(1年後)

	根気	活力	誠実	好奇心	寛容	R	R ²
生活充実感	0.21	0.319		0.05	0.08	0.672	0.449
主観的幸福感	0.14	0.304		0.134	0.067	0.534	0.282
ポジティブ1(活動的)	0.138	0.491		0.179	0.06	0.778	0.603
ポジティブ2(非活動)	0.339	0.172	0.203	0.072		0.665	0.44
ネガティブ	-0.24		-0.13	-0.11		0.446	0.196

考 察

品性は、ポジティブな感情、充実感とはプラスの相関、ネガティブさとはマイナスの相関があり、人の健全な発達に関わっている。しかしその発達は、単調増加的に量的に増加するものではなく、その内容が変化するような、質的発達を遂げることが窺える。考えてみると、小学校4年生は単にやっている気になっているだけかもしれない。品性について意識し始め、それを自分の行動目標にしたなら、目標が高くなり、かえって「まだ到達していない」と思うのかもしれない。いずれにしろ、今後はパターン分けするような、もっと細かい分析が必要である。

引用文献

Aoki, T., Yamada, T. Miyazaki, H., & Hashigaya, Y. (2008) Character strengths and the relationship with well-being for children and students in Japan. 29th International Congress of Psychology, Berlin.
Aoki, T., & Kaneko, Y. (2009) Character strengths and the relationship with well-being for children and students in Japanese Children and Adolescents. SRCD biennial meeting, Denver.
Peterson, C., & Seligman, M. E. P. (2004) Character strengths and virtues; A classification manual and handbook. Oxford University Press.

(注) 基盤(B) (代表: 青木多寿子, 18330191) の経費を使用した。なお本稿は昨年度発表できなかった原稿に加筆修正をおこなったものである。